



雍州路・鞍馬付近 画 蓮佛亨

京都子どもを守る会のあれこれ
四十五年のあゆみから
関谷美奈子

「闘争」後編 (二)
レイテ島の記録 (二)
伊藤 和市
田中 豊蔵

私たちがおどろいたのは、区長さんが「ちびっこ広場にするために宅地はありませんか」と区民のところへ相談にこられたことです。民主市政というのはこんなものかしら……と大喜びをしたことを今も忘れることができません。

今ちびっこ広場は荒れはててゴミすて場になつたり、不法駐車のたまり場になつたりしているのをみるとつけ、やっぱり民主市政でないとあかんあと心からおもいます。

●民主府政落城～国際児童年の活動（一九七八年～一九八一年）

林田府政になつて

一九七八年に、革新の灯台と言われた、京都の民主府政が落城し、林田府政になると、"憲法を暮らしの中に生かそう"という、府民が大切な合言葉としてきた、府庁のたれ幕がすぐにひきおろされた年になりました。

平和運動と国際児童年の活動

一九七八年は、国連軍縮特別総会がはじめて開かれ、日本からは二千万人の「核兵器完全禁止」の署名を持つて、五〇二人の代表が参加。京都からは、子どもを守る会の関谷美奈子が婦人の代表として参加しました。

●子どもの権利条約を中心にして（一九八六年～一九九二年）

四〇周年～四五周年へ
(一九九三年～一九九七年)

教師部会と親の懇談会や代表者

一九八九年、国連で子どもの権利条約が採択されると、京都でも早期批准にむけて、"守ろう子どもの人権京都実行委員会"が結成され、子ども自身が、自分で考えて、自分の声を発表する、京都子ども会議も毎年とりくまれるようになつてきました。

若者サークルも、"二〇年～二一年にむけての集い"を行いOBOのとりくみをつよめてきました。

若者サークル出身の掛村岳志君

国連児童権利宣言を記念して一月二五日には、子どもを守る大ページェントが行われ、五万人の人たちが、鴨川河川敷や教文センター・京都大学の広場にあふれました。生協は、乳牛を連れてくる。京建労のおじさんは廃材で子どもといっしょに小さな家をつくる。鴨川の河川敷には、鴨川鉄道スリンガイン号のミニ列車がはしる。消防のハシゴ車で大放水。

バザーや、人形劇、教育・文化・健康・福祉・平和など五つの分野のシンポジウムなどなど。入場券がたりなくなつて、あわてて印刷など裏方さんの仕事も大失敗でした。

でも今も胸いたむことは、国際児童年京都会議のよびかけをされ里井陸郎先生を、翌年四月に失つたことです。

●子どもの権利条約を中心にして（一九八六年～一九九二年）

四〇周年～四五周年へ
(一九九三年～一九九七年)

子どもを守る文化会議は、またたくさんの置きみやげを、京都にのこしました。

このあと地元の実行委員会に集した団体が、京都子どもを守る連絡会を結成、春・秋の子ども月間を、この子どもを守る連絡会が中心になつて幅広い層に子どもを守る運動をひろめることになりました。

子どもを守る文化会議は、またたくさんの置きみやげを、京都にのこしました。

一九九〇年には、第三五回子どもを守る文化会議が京都で開かれ、全国からよせられた一万羽の折鶴で、花には太陽を子どもには平和を"のタペストリーがつくりました。子どもを守る運動に大きなはげましをあたえました。

一九九二年、結成四〇周年を祝つて写真でつづる四〇周年のあゆみと、手づくり巻き物年表をつくりました。

このあと地元の実行委員会に集した団体が、京都子どもを守る連絡会を結成、春・秋の子ども月間を、この子どもを守る連絡会が中心になつて幅広い層に子どもを守る運動をひろめることになりました。

子どもを守る文化会議は、またたくさんの置きみやげを、京都にのこしました。

（筆者の諒解を得て京都子どもを守る会「四〇～四五年的あゆみ」から抄録させていただきました。桂高校生の"国連の子どもの権利委員会への訴え"の行動は、新しい二一世紀にむけて、私たちに大きな夢をあたえてくれました。

京都子どもを守る会の四五年のあゆみの中で、みんなに惜しまれながら亡くなられたみなさんに心からの感謝の言葉をおくります。

が京都へ帰ってきたのをきっかけに、親と子のコンサートもひらかれました。

桂高校生の"国連の子どもの権利委員会への訴え"の行動は、新

しい二一世紀にむけて、私たちに大きな夢をあたえてくれました。

京都子どもを守る会の四五年のあゆみの中で、みんなに惜しまれながら亡くなられたみなさんに心からの感謝の言葉をおくります。

レイテ島の記録抄

——京都一六師団戦記(二)

伊藤和市

プラウエン飛行場付近
翌朝、大きな犠牲を出した台地から一山越えた所に小さな平地があつた。人里近しという感じである。昨日のことここにこりてゐるから、今度は用心深く歩いてゐるところ、驚いたことにここには新しい日本兵の死体がごろごろしている。まだ白骨化していない悪臭のブンブンする死骸の中を、あたりを警戒しながら進んで行くと死骸の中から声をかけられた。まだ生き残っている者もいたのだ。足に負傷して歩けないらしい。水を飲ましむほしいといふので私は水筒を差しだし水を与えた。彼は二〇連隊の下士官でしつかりとした口調で話しだした。この附近にいるのは敵ばかりでもう日本兵は誰もいないこと。ここはプラウエン飛行場の近くであること。こんな所にまごまごしていられないで体力のある間に早くオルモックへ行きなさいと、負傷兵に励まされた。あた

され道を変更したので、いつの間にかプラウエン付近に來ていたのだ。須原中尉は全員を集め、「ダガミへ行くのはよそう。食糧がないのが気がかりだが、とにかくオルモックへ行こう。軍法会議にかけられるようなことになれば僕が全責任をとります。ここにいては全員餓死か玉碎してしまうだけだ」

大体このようない言葉であった。召集軍医ばかりで編成されていた我が第四野戦病院の将校はたいてい自分という言葉を用ひず僕といつてはいた。そして本科の将校のごく厳しく我々部隊にもやさしく紳士的であった。私たちもホツとして皆の顔を眺め回してみると、誰も彼も疲労しきつた顔色の中にも喜色があふれ、一縷の希望を持つことができた。負傷した下士官と別れ再びオルモックへ引き返し

りは、死骸ばかりでまだ生命のあるのは、彼一人きりである。ダガミにいるつもりが途中で敵に襲撃され道を変更したので、いつの間にかプラウエン付近に來ていたのだ。須原中尉は全員を集め、「ダガミへ行くのはよそう。食糧がないのが気がかりだが、とにかくオルモックへ行こう。軍法会議にかけられるようなことになれば僕が全責任をとります。ここにいては全員餓死か玉碎してしまうだけだ」

ゼントを輜重隊がくれた。真四角の飯と砂糖、梅干し、かつを節を圧縮した日本軍の非常携帯口糧である。この貴重な携帯口糧を各自一〇個づつくれた。一食分を一日分に食い延ばせば一〇日もあればオルモックまで行ける位置に到着していた。地獄で仏にあつた心地である。

輜重隊もプラウエンに行くのを取りやめ、オルモックへ引き返して行つたが。私たちは落伍兵からは氣味の悪い噂がもつともらしく伝わってきた。それは、野獸化した集団があちこちに潜んでいて、一人で行動している者等を殺してその肉を食べてしまうという話である。その噂が本当なら全く恐るべき事態となつてきたのである。飢餓のため人に食人種になるまで落ちた同胞が本当にいるだろうか。信じたくない。我々は今携帯口糧を持って

ルモックを目指し引き返した。

その翌日、昭和一九年一二月九日。

我々は、山の中の沼のような水たまりのある場所で露営した。このあたりまで来ると、敵は全く現われずオルモックへ向かう他部隊の兵もだんだん増えてきた。今日は開戦日であるので、磁石によつて東北北方へ向かい宮城遙拝した。この時、誰も前線に向かうものがない時に、プラウエン方面に行く元気な輜重隊約三〇名程がきて近くで休憩した。各兵糧まつを携行している。こんな元気な兵たちを見るのは久しぶりだつた。二六師団の輜重隊であつた。須原中尉は早速、この隊長に我々の飢餓の状態を訴えた。その結果全く夢にも思わなかつた開戦記念日のプレゼントを輜重隊がくれた。真四角の飯と砂糖、梅干し、かつを節を圧縮した日本軍の非常携帯口糧である。この貴重な携帯口糧を各自一〇個づつくれた。一食分を一日分に食い延ばせば一〇日もあればオルモックまで行ける位置に到着していた。地獄で仏にあつた心地である。

地獄道

他部隊の落伍兵からは氣味の悪い噂がもつともらしく伝わってきた。それは、野獸化した集団があちこちに潜んでいて、一人で行動している者等を殺してその肉を食べてしまうという話である。その噂が本当なら全く恐るべき事態となつてきたのである。飢餓のため人に食人種になるまで落ちた同胞が本当にいるだろうか。信じたくない。我々は今携帯口糧を持って

いるので、寝る時はかたまつて寝るよう隊長の指示があった。我々は、敵も警戒しなければならないが、友軍の中の極悪な兵をも警戒しなければならなくなつた。我々の部隊の中にも気が変になつてきたのか、平素は豪快な男であつたN兵長が、「おい、今度比島人を見つけたら、女でも子どもでも年寄りでもいいから殺して食おうじやないか、人間の肉つてどんな味がするんだろうなあ、旨いだろうなあ……井上さんは炊事班長だから責任もつて料理してくれよ」農業出身で実直な井上伍長は

「いくら俺が炊事班長でも魚や鶏なら殺してもいいが人間を料理するなんて俺にはとてもできないよ」

こんな恐ろしいことを平氣でN兵長は一度ならず二度、三度と口走るので須原中尉、神主出身の村城伍長が人間の道徳はこういった究極の時こそ最も大切であるとこんこんと言い聞かせていた。帰りのオルモック行きは、進んできた道と異なつていた。この道も土民道であるが道らしき道がついていて歩き良かつた。だが、行けども行けども、死骸、こじきのようになつている兵たちの中を進んで行かねばならなかつた。

村城さんが、「もし我々が、内地

へ無事に帰れるようなことになれば、年に一回くらい、どこかで集合して芋だけで会食しようじやないですか。その時は塩なしで芋と水だけでやりませんか」と言いだした。「せめて、塩くらい日本へ帰れば使おうや、水だけやなんて言わないで、あの美味しいお茶くらい飲ませてくれや」中村信一兵長（滋賀県坂田郡出身）が意見を出した。

「やはり、塩もお茶も抜きで、この苦しいレイテ戦を思い出そうじやないですか、その方がずっと有意義だと思うんだがね」私もこれには大いに賛成した。だが惜しいことに、この場にいた戦友たちは、みんな戦死してしまつた。私一人この思い出を大切にして一年一回、一月二三日と日を決めて、薩摩芋と水だけの日をして、だまされていたら、あるいは食べていたら君も手を出すだろう」「いや、僕は食わないね。猿とか猫とか他の動物の肉だといつて、だまされていたら、あるいは、食べていたら君も手を出すだろう」「いや、僕は食わないね。猿とか猫とか他の動物の肉だといつて、だまされていたら、あるいは、食べていたら君も手を出すだろう」「いや、僕は食かないね」

対食わぬいね」さすが、村城さんは立派である。しばらくして、彼の部隊の人たちが三角山をめざして、疲れた身体を引きずるように、のらりくらりとした足取りで出発して行つてから、私は、いろいろと考えをめぐらせた。俘虜の経験がある彼が、私たちと同じようにこの山の中へ向かつてはいる。

昭和二〇年一月二二日、夜
幅の広い国道のような道にでた。あたりは、静寂である。この道はカリガラからオルモックに通じる幹線道路であると直感した。この道路上は特に敵を警戒して、物音を立てぬよう、低い姿勢で這うようにして横切つた。道路の向かい側は草むらがあり、河原となつた。川幅は一〇メートルくらいあり、この川も雨季のため増水

していました。一度俘虜になりたが、汚名を着せられたから、もう、二度と死んでも俘虜になるまい、と決心しているのか。あるいは、再度俘虜になりたいと思っているが、その機会をつかむことができなかつたのか。

度比島人を見つけたら食っちゃおうじゃないか」
村城さんが、「中村君、君はまた、そんなこと言ひだす。人食い人種になるようないことは言わないでくれよ、人間は肉食しなくとも菜食だけでも生きていけるんだよ」「そりや君はね、神主さんだからそんな偉そ

いなこと言つとるが、もしもだぜ、人間の肉をこうしてみんなで食べて、だまされていたら、あるいは、食べわんとも限らないが、はじめかから人間の肉だとわかつていたら絶対食わぬいね」

彼とはここで別れたり、再び会うことはできなかつた。私は、俘虜になりたい、心の底で思つてながら、彼から肝心な要点を聞き出すこともできず、また勇気を出して台地を降り、海岸線にある道路まで米軍のいる地点まで行くこともできなかつた。

台湾へ転出させてくれる、口から一歩一歩重い足を三角山へと進めていた。

やはり、米軍の俘虜生活はつらかったのか、いや、そういうじやない。ルセナでも軟禁生活の時、「こんな待遇をされるのなら、バターンで俘虜だった時の方が、よっぽど

まし」と各自が言つていたことを耳にしていた。一度俘虜という

汚名を着せられたから、もう、二度と死んでも俘虜になるまい、と決心しているのか。あるいは、再度俘虜になりたいと思っているが、その機会をつかむことができなかつたのか。

あたりまであり、流されぬよう用心しながら、やつとの思いで向う岸へたどりついた。敵中横断をはじめから、まだ一度も敵に遭遇したことなく、敵中であるだけにいつそう緊張感が増してきた。それから、五分間ほど前進した頃である。前方の他部隊の誰かが敵に発見されたのか、照明弾が打ち上げられ、機関銃でバリバリ撃ってきた。慌てて横にあつた小川に飛び込んだ。猛烈に撃つてくるが小川が壕のような役目を果たしてくれた。私は無傷であった。機関銃の音は二〇分くらいでやみ、またあたりは元の静寂に帰った。

俘虜への決意

私はこの時、無性に俘虜になつてしまひたくなつた。俘虜になつて戦車で轢き殺されるかもわからぬ。まさか、そんなことはしないだろう。目的地パロンポン北方の三角山までは、とても無事で行けそうもない。もし、万難を排して行けたとしても、この惨状では台湾へ転出させてくれるなんて思ひもよらぬことだろう。いずれどこかで野垂れ死、してしまうような気がする。

俘虜になるなら、今がそのチャンスじやないか、と自分で自分を

納得させた。すると、なんだか、自分の生命をかけた、博打をするような気分になって、この一世一代の大博打を一か八かやってみようと決心した。

私の現在いる位置は（後で判明したのであるが、オルモック東北方バレンシアという小さな部落があり、それより少し北方のカリガラに通じるいわゆるオルモック街道の傍である）

さて、俘虜になろうと決心して道路上を、アバカや雑木の透き間から窓ついていた。衛生部隊か、後方勤務部隊か、なるべく慈悲深そうな敵に捕らえてほしかつた。なぜなら殺し合いをしている前線の兵なら殺氣だつているだろうし、日本兵の中でも平氣で人殺しのできるような人間もいれば、慈悲深い人間もいる。だが、私の望んでいるような部隊は通過しない。もし、殺されそうな気配を感じたら、すぐさま自爆できるように、手榴弾をズボンのポケットに忍ばせて用意していた。一時間くらいこんなことをしていただろうか。すると、ずっと向こうからたつたトカラ

停車したと同時にトラックの上にいた米兵たち七、八名が飛び降りて、ぐつと銃を構えて私を取り巻いた。米兵の中から勇敢な男が一人近寄ってきて私の身体を検査した。他の米兵たちは、私に銃を向けたままじっとしている。検査をしていた兵には殺意は感じられなかつた。

私のズボンの右ポケットには、すぐ発火できるようにして手榴弾が入れてあるが、その上をなでて調べていたが彼は上気していたのか、気がつかぬまま帶剣のみ外し検査は終わつた。私の胸のポケットから

のトラック目がけて、手を挙げ道路の真ん中に飛び出して行つた。

手を挙げるということ、我々日

本兵はスペルタ教育を受けていたから、なかなか恥ずかしいものである。

私が、手を挙げて突然飛び出したので、疾走してきたトラックは不意の日本兵の出現に驚き、キュートものすごい急ブレーキの音をたてて停車した。

私たち日本軍が必死になつて横断するのに、たつぱり二週間かかるこのレイテ背梁山脈の中を、バイアードアブヨグ間に細い横断道路があつたらしいが、その道路がブルドーザーで幅は拡張され、立派な道路が着々と造られつつあります。ここまで行つても山中に戦車、大砲、ブルドーザーがまるで兵器の商品見本市のごとく絶ゆることなく道路の片側に置いてあります。これだけ持てる国と戦争していくには、いくら大和魂があつても太刀打ちはできない。

二、三時間カーブの多い山間道を走つて東海岸のアブヨグに入れてあるが、その上をなでて調べていたが彼は上気していたのか、気がつかぬまま帶剣のみ外し検査は終わつた。私の胸のポケットの仮収容所らしきところは一〇平方メートルくらいの狭い土地に桟子の幹を建て有刺鉄線を張りめぐらした中に小さなテントが一つ、ベッドもなく、囲いの隅には用便用の空き缶が置いてあつた。テン

瞬間に俘虜になるのなら今だ。一台だけのトラックとは後方勤務部隊に違ひない。意を決して、そ

「日本軍の将兵に告ぐ」「日夜砲撃」

と二枚の宣伝ビラを取りだし、この米兵に渡した。彼らは、このビラを取りあげ口々になにか話を

合つていた。やがて、この検査をした兵の合図で二人の兵が私の身体を抱き上げトラックの中へほうり込んだ。

トラックの中は砂が積んであつた。心配していた俘虜になること無事になれたわけである。

トの中には、先客さんが三人いた。いずれも第一師団の兵で、その中の一人は准尉である。みな東京の第一師団であり私が京都の第六師団である。上半身裸で腕に入れ墨をした金髪の炊事兵がパンと、まだ湯気のあがつているできたてのハンバーグステーキをケーキ型に切ってくれた。これにコーヒーが付いた。量こそ少ないがこれほど良質の食事を俘虜に与えてくれる。

「こんな食事は今の日本の総理大臣でも食つていらないぞ」

「いや、総理大臣ともなればいくら戦時下でも、もっと贅沢をしているぞ」

と我々は、こんな会話をしていた。

翌朝、昭和二〇年一月二十五日。タクロバン収容所へ送られるべく、我々六名はトラックに乗った。

(前号で伊藤氏の著書を『レイテ島における記録と戦友たち』としましたが、「レイテ島における記録と戦友たち」の誤りでした。お詫びとともに訂正いたします)

トの中には、先客さんが三人いた。いずれも第一師団の兵で、その中の一人は准尉である。みな東京の第一師団であり私が京都の第六師団である。上半身裸で腕に入れ墨をした金髪の炊事兵がパンと、まだ湯気のあがつているできたてのハンバーグステーキをケーキ型に切ってくれた。これにコーヒーが付いた。量こそ少ないがこれほど良質の食事を俘虜に与えてくれる。

「こんな食事は今の日本の総理大臣でも食つていらないぞ」

「いや、総理大臣ともなればいくら戦時下でも、もっと贅沢をしているぞ」

と我々は、こんな会話をしていた。

翌朝、昭和二〇年一月二十五日。タクロバン収容所へ送られるべく、我々六名はトラックに乗った。

(前号で伊藤氏の著書を『レイテ島における記録と戦友たち』としましたが、「レイテ島における記録と戦友たち」の誤りでした。お詫びとともに訂正いたします)

鬪

争

後編(一一)

田中 豊蔵

二、敗戦!! 「貴様等のよき日が来た」

一九四五(昭和二〇)年八月一日

私はこの時ちょうど陸軍野砲隊で召集され、和歌山県の海草郡の潮岬近くの町にきておりました。

そしてとある町家の長屋にラジオがあり、一二時正午に天皇の放送に出くわしました。

これは私にとって千金に値します。

中尉は「貴様は苦労しておるな、頑張つて国のためにつくしてくれ」と言つて二人はラジオを聞いておりましたが、そこで別れました。

私たちが駐屯しているお寺の庭も急にあわただしくなりました。全員集合がかかりました。

部隊長が来てあいさつをしました。部隊長は中佐です。

兵隊約五〇名の前で部隊長が、

「本日をもつて我々は解散する。

諸氏等は郷里に帰つて、アメリカの進駐軍が上陸してくるだろうから私は不動の姿勢で敬礼をしました。すると中尉は、「天皇の勅意か」私は「そうであります」と答ました。

た。そしたら、「どうだ」と言います。それで私は「残念であります。

私は特に戦争に敗れたのはそれ

兄弟四人皆が召集で第二人は戦死。一人は病死、残つたのは小生一人、四二歳で舞鶴の徴用現場から召集を受けて、今日この海草郡にきております。今日のありさまは残念です」と申しました。

事件以降侵略戦争反対等で、京都府の特高課及び七条署の特高課等に弾圧されました。悪どい妨害で

行く先々の工場で雇用するなど

事件以降侵略戦争反対等で、京都府の特高課及び七条署の特高課等に弾圧されました。悪どい妨害で

行く先々の工場で雇用するなど

事件以降侵略戦争反対等で、京都府の特高課及び七条署の特高課等に弾圧されました。悪どい妨害で

行く先々の工場で雇用するなど

事件以降侵略戦争反対等で、京都府の特高課及び七条署の特高課等に弾圧されました。悪どい妨害で

いる。よろしくたのむ。諸君への荷物は本部から各班に届けてある。みんなご苦労であった。元気で故郷に帰つて頑張つてくれ」と別れのあいさつをしました。

そのあとで二日分の食糧として米二合、カンメンパン二袋、毛布二枚が支給されました。

他の部隊のこととは知りませんが、ただただ家に帰れる嬉しさは

全兵隊同じ気持ちです。

私は特に戦争に敗れたのはそれ

でよい、と思いました。

私はこの二〇年余り、三・一五

事件以降侵略戦争反対等で、京都府の特高課及び七条署の特高課等に弾圧されました。悪どい妨害で

「田中おるか、用事がある」

と言つて面会に来ました。

「田中、軍にありてはご苦労様でした。長年の間京都府特高課で苦しめられその上軍隊にまで引っ張られ、この中隊まで一部始終の

ことが警察から軍隊にまで通知がきている。軍としては田中を要注意人物として注意しておった。しかしに軍隊ではまじめに軍務につ

き、よくきばつてくれた。今日になつて日本帝國軍隊は降伏になる。貴様等のよき日が近づいた。

平和と自由が目の前に来た。貴様の苦労のかいがあつた。今後とも社会のため、労働者の日々の生活向上につくされたい。自分は前から知つていた。本部の指揮班でも注意をおこした。よくガバッタぞ、お礼を申すぞ」と。そして向こうから敬礼をしました。

あとで聞いたのですが、この見習士官は大学出の学生で見習士官になつていていたのです。

私はうれしい思いでほかの兵士と別れました。

「古兵殿、大変お世話になり厚く御礼申します」と、私は京都出身だけを聞いて住所は聞いていませんでしたが。また滋賀県の農

民の兵士は、「田中さん、子ども三人家で大変でしょう。私は米二合ありません。子どもさんに炊いて食べさせてあげてください」といつて私にくれました。その米二合がどれほど嬉しかったことか

。私はそのカンメンパン三袋だけをもらって滋賀県に帰つていく兵士を涙のうるむ目で見送りました。

みんな兵隊は私に「古兵殿、一度私の家に来てください」といましたが、私は所も番地も聞きました。『釜の底のコゲメシをみんなでわけて食べたこと。忘れられないよい思い出になるなあ』

などと笑いあいました。

私も家のことを案じており午後三時ころ京都行きに乗り、夕方京のわが家に帰つきました。

近所の人々が出迎えに来てくださいました。妻や子どもの元気な姿を見てとても嬉しく思いました。自分のもらった米二合と滋賀県の兵士がくれた二合の米に麦を五合入れ、約一升ほどのものにして焼き、父母姉妹、妻子がよばれました。『元氣で帰つてきたことがなによりのご馳走』とよばれたのでした。

近くの人々はたくさんのお米や毛布をもつて帰つた人があつた

が、「田中さんは米二合、カンメンパン二袋、毛布二枚とみじめな帰還兵だな」と言われました。

そして私は明日から仕事をみつけなければなりません。貧しい身の上の兵隊です。

次男の嘉一は中支で戦死、三男は呉海軍へ徴用、四男は海軍航空兵で戦死、長男の私だけが無事に帰りました。

父は「弟は戦死してもうたけど、長男が帰つてきてうれしい」、妻や子どもらは「お父さん帰つてきただけでもうれしい」と喜びました。

会おおよび会報については、左記へご連絡ください。

〔事務局〕

〒六〇五一〇九五三

京都市東山区今熊野
南日吉町三九 奥村和郎

TEL FAX
○七五—五六一一七四八五

